

調査の概要

1. 趣旨

不登校に関する状況や支援の現状を把握し、今後の支援策を推進し充実させるため、不登校や不登校傾向の児童生徒及び保護者に対するアンケート調査を実施する。

2. 調査方法

○調査対象：

令和6年度の小学校3年生から中学校2年生のうち、何らかの理由により学校への欠席が連続的又は断続的な児童生徒及びその保護者【任意回答】

○調査方法：

Google フォームによる回答（市教委より「すぐーる」での配信）

○調査期間：

令和7年2月28日（金）から令和7年3月19日（水）

○有効回答数：

・児童生徒（67名、35.1%）、保護者（105名、55.0%）

※小3～中2の不登校及び不登校児童生徒数 191名

調査の概要

3. 調査サマリー

(1) 休み始めた時期について

最も多かったのは中学校 1 年生であり、次いで、小学校 4 年生、小学校 5 年生の順であった。

(2) 学校に行きづらいと感じる理由について

【児童生徒の回答】

- ・最も多かった回答は「わからない」。
- ・次いで、「朝起きられない」「何もしたくない気持ちになった」「友達とうまくいかない」「授業がよくわからない」などが挙げられた。

【保護者の回答】

- ・最も多かった回答は「友達とうまくいかない」。
- ・次に「朝起きられない」「学校の居心地が悪い」「先生とうまくいかない」「学校に行こうとすると体調が悪くなる」などが挙げられた。

(3) 行きづらさについての相談相手

児童生徒・保護者ともに、最も多かった相談相手は「家族」、次いで「担任の先生」と回答。

(4) 学校への相談のしやすさ

「とてもそう思う」「少しそう思う」と答えた割合：

- ・児童生徒 63%
- ・保護者 50%

(5) 学校や教育支援センターへの通所状況

学校や市教育支援センターに通っていない児童生徒の多くは、他の施設等にも通っていないことが明らかになった。

(6) 学校に通っていない児童生徒の過ごし方

通っていない児童生徒の過ごし方としては、

- ・最も多いのが「インターネット・動画を見る」。
- ・次いで「ゲームをする」と回答。

(7) 通いやすい学校の在り方

【児童生徒の回答】

- ・「自分のペースで勉強できる」「宿題が少ない」が最も多い。
- ・次いで、「朝ゆっくり学校に来られる」「つらい時は休んだり、半日で帰ることができる」と回答。

【保護者の回答】

- ・最も多かったのは「つらい時に休んだり、半日で帰ることができる」。
- ・次いで、「苦手なことを個別に助けてもらえる」「自分のペースで勉強できる」と回答。

(8) 現在困っていること

【児童生徒の回答】

- ・最も多い回答は「特にない」。
- ・次いで、「勉強の遅れ」と回答。

【保護者の回答】

- ・最も多い回答は「勉強の遅れ」。
- ・次いで「進学先について（どんなものがあるか、行けるかなど）」。

(9) 「学びの多様化学校」への通学希望

「とてもある」「少しある」と回答した割合：

- ・児童生徒：85%
- ・保護者：82%

(10) 安心して学べるためのサポート

【児童生徒の回答】

- ・最も多い回答は「特にない」。
- ・次いで「友達からの声かけ」「学校内の教室以外の居場所や勉強のできる場所が増えること」と回答。

【保護者の回答】

- ・最も多かったのは「学校の中の教室以外の居場所や勉強のできる場所が増えること」。
- ・次いで「オンラインで学習できる環境」「同じ思いをしている友達同士で相談できること」と回答。

調査の考察

4. 調査の考察（困り感や願い）

（1）「わからない」「朝起きられない」の背景

- ・児童生徒が回答する「わからない」は、学習内容が分からないというよりも、心理的な混乱状態を表している可能性がある。
- ・「朝起きられない」という訴えも、単なる生活習慣の乱れではなく、心身の不調や社会的要因が背景にあると考えられるため、丁寧な理由の掘り下げが必要である。

（2）中学1年生に多い傾向と「中1ギャップ」

- ・複数の小学校から生徒が集まり、新たな人間関係が始まる中学1年生での不登校が多く、「中1ギャップ」として表れている。
- ・小学校時代の人間関係不信が持ち越されるケースや、感覚過敏・学習症などの特性ある生徒も一定数存在する。

（3）児童生徒の保護者の意識の違い

- ・児童生徒は「楽しく過ごしたい」「安心できる場所が欲しい」といった気持ちをもつ一方で、保護者は「働きたい」「登校してほしい」といった願いも抱えている。
- ・双方の意識差を理解したうえで、対応する必要がある。

（4）安心できる環境・場の必要性

- ・学校内に「安心して過ごせる居場所」の設置が求められる。
- ・教室以外の学習スペースや、心を落ち着けられる空間の整備が効果的である。
- ・児童生徒・保護者がそれぞれ経験や思いを語りあえる場の提供も重要。

（5）将来への不安と情報発信の必要性

- ・児童生徒・保護者ともに「このまま将来どうなるのか」という不安を抱えている。
- ・不登校を経験した人のその後の進路や社会での活躍など、ポジティブな情報発信が求められる。

（6）段階的な支援と目標設定の重要性

- ・登校ではなく「学校の近くまで行く」など、手前の目標を設定する段階的支援が有効である。

（7）支援のタイミングと相談環境

- ・支援が必要な児童生徒・保護者とつながるまでに時間がかかることが多く、タイミングを見極める柔軟な対応が必要。
- ・「誰に相談してよいか分からない」「相談したらどう思われるか心配」といった声もあり、相談環境の整備と情報発信が重要となる。

(8) 新たな学びのスタイルへの期待

- ・多くの児童生徒が「自分のペースで学びたい」「無理なく登校したい」と考えている。
- ・フリースクールや学びの多様化学校など、柔軟で個別性の高い学びの場の整備が望まれる。
- ・学校もまた、「安全で安心な場所」となる必要がある。

(9) 社会的背景と個別支援の必要性

- ・スマートフォンの利用による昼夜逆転、LINE 等の SNS による関係ストレス、自己肯定感の低下、家庭環境の複雑さなど、不登校の背景は多様化している。
- ・誰にでも起こり得ることであり、「初期対応」と「共通理解」がポイントとなる。
- ・個々の特性や背景に応じた柔軟な支援が今後もますます求められる。